

里海コラム

Vol.6
2023.09

SATOUMI COLUMN

江田島市のかげがえのない地域資源を多くの人に知ってもらい
生かしていく社会システムが出来上がることを目標とし
世界に発信するためのキーワードである”里海”を探求していきます！

プロセス：里海暮らし→里海連携→里海拠点

里海とは？ 人と自然の関わり合いによる循環構造によって、
文化が醸成され、環境の好循環が起きる沿岸海域



地域おこし協力隊 - 守本怜矢
二級建築士・宅地建物取引士
さとうみ科学館配属

1994.05.02 尾道市向島出身
大学時代：中山間地域における
古民家と地域コミュニティの研究
2018-2019：江田島市沖美町における
海上レストラン事業企画設計担当
2019-2022：建築事務所で店舗設計
施工管理・CG制作を経験後、現職
県立広島大学経営管理研究科在籍

地元尾道のまちづくりによって、
町が元気になる様子を見て育ち
自分も夢あふれる楽しいまちを
作る人になりたいと志し建築の道へ
大好きな瀬戸内海をもっと世界に
発信したいと日々奔走している。

里海イメージ



自然資源が持続していくために考える

前回は、地域の開かれた場所を介したコミュニティによる相互扶助の
関係性が出来ていくための、「コモンズ」という考え方を紹介しました。
環境省の環境白書でもコモンズについて触れられているため、今回は、
人と自然との関わり合いの側面から少し掘り下げてみます。私たちの暮
らしは、自然資源により支えられていますが、現代の都市部では、資源
の消費の場が資源の採取の場から離れてしまい、共有財としての自然資
源を日常生活の中で実感することが困難になっています。そこから生ま
れた課題の代表が海ごみ問題でしょう。

直接的に自然採取を行わない人が多くなった現代では、自分達の消費活
動が優先され、維持保全のことは後回しになってしまい、我々の暮らし
を取り巻く大きな課題を生み出してしまいました。だからこそ、そんな
共有資源の危機を救うことを目的とした取り組みが、これからの自然と
の関わり方となることでしょう。食べるために自然物を取る時代から、
食べ続けるためにゴミを取る時代へ。そうした取り組みが、共同体が希
薄化した現代において、人との繋がりを強くしてくれる重要な機会とな
ることでしょう。私自身、そうした取り組みで多くの出会いがあり、人
が出会うきっかけとしてのゴミ拾いも新しい暮らし方として定着して欲
しいと思います。次回は、人と自然との関わり方が江田島ではどのよう
なものがあるか考察しようと思います。



里海のいろは

概念が広く奥深い里海ってどんなところなんだろうか

白砂青松の瀬戸内海はどうして生まれたのか

塩作りが産業として栄え、景色を変えた

瀬戸内海における大きな産業基盤として栄えたのが塩作りでした。この背景には前回の綿花同様、中国・四国山地に囲まれた晴天の多い地理的特性が影響しています。

古代は、海藻に繰り返し海水をふりかけ水分を蒸発させ、付着した塩粒を洗い流して高塩分水（かん水）を作り、それを製塩土器で煮沸することで塩を製塩していました。このようなかん水の塩分濃縮法は、技術の進歩で効率化しても基本的には変わることなく、最終的にかん水を煮詰めるため、大量の燃料を必要としました。そのため、島嶼部の広葉樹は早期に伐採されつくし、花崗岩のはげ山が生じ、雨風の侵食を受けたマサ土は瀬戸内海の海岸まで流れくんだり、白い砂浜を形成しました。その砂浜には強い海風が吹き荒れるため、塩害や家屋への飛砂の被害をもたらしました。その被害は凄まじく田畑だけでなく時には家を埋めるほどだったそうです。そのためそれらを防ぐ、防風林を作るため住民が総出で塩害に強い松を植え、安全を願い祠を立てたそうです。それらの営みにより、倉橋島の桂浜の様な瀬戸内海の美しい白砂青松が生まれたそうです。



文化 主産業の塩作り



製塩の過程で火を必要とするため多くの森林伐採が行われる

環境 花崗岩の砂浜形成



集落を飛砂から守る防風林
白砂青松の景色の誕生

あとがき

筆者自身が現在進めている活動や取り組みに対する思い
今後やっていきたいことなどをつらつら書いてみます。

8月の末から9月の頭の6日間、同志社大学の学生団体ハビタット総勢35名が江田島に来て、空き家改修などの取り組みを沖美と秋月で行ってくれました！僕も秋月の古民家の残置物の運び出しや、空き地の整地作業、里海拠点提案に向けた敷地模型制作など、さまざまな取り組みの支援をしてもらいました。学生たちは「まだ自分達がどのようなことに取り組んでいきたいかわからない。だからこそやってみたいと思う地域活性を自分達の手で支援し、体感してみたい。」そんな熱い想いで、真夏の暑さの中、毎日活動してくれました。僕自身、自分がどのような想いで取り組むのか、再認識させてもらえる大変貴重な機会でした。

